

ただ最高のホテルとして 味と湯の宿 ニューとみよし

現在日本の産業にダメージを与える新型コロナ。このような状況の中、ホテル「ニューとみよし」は6月から12月のGOTOの期間にほぼ毎日全部屋満室という驚くべき結果を残した。ホテルとしてコロナ禍をどう受け止め、どう経営し、そして会社としてどうあるとしたのか、代表取締役社長の富岡篤美さんに話を聞いた。

富岡さんの実家では父と兄が「富義丸」という船を操業しており、その漁船から名を取った「とみよし」という宿を網代で営んでいた。次男であった富岡さんは、分家し伊豆多賀の地で宿泊業を始め、生家の宿名に「ニュー」を付け加え、「ニューとみよし」が誕生した。宿のある伊豆多賀は、自然豊かな場所、熱海駅周辺の街並みとはまた一味違う、ゆったりとした雰囲気味わえる。カッブルや家族連れなどの個人客が多いのが特徴で、少人数でゆったりと食事や温泉を味わえることを「ニューとみよし」の売りとしている。富岡さんはコロナ禍においてのこういった客層について「高齢の方や乳幼児等の利用は少なく、健康な若い人の利用が多い。私みたいに不健康な人の割合は少ない。(笑)」と語った。

多賀をより魅力的に

このように伊豆多賀の魅力と顧客のニーズを合わせてサービスを提供している「ニューとみよし」だが、地域社会とも強いつながりがあり、熱海高校と「ニューとみよし」のコラボ企画である高



楽しそうに語る富岡篤美さん

校生ホテルだけではなく長浜海岸の清掃にも携わっていたり、管理や開発にも関わっている。富岡さんは地域との交流について「地域の支えがなければ宿泊業は難しい。長浜海岸等の観光の拠点をきちんと整備し魅力ある街づくり地域と一緒にやって取り組まなければいけない。」と語った。

経営者として

富岡さんは仕事で意識していることについて「従業員にも言っている自分も心掛けていことだが正直にやることを心掛けていく。普通できないことをできないと言わない。お客さんにも始めにできることとできないことをはっきりと心掛けていく。最初に中途半端にできないことをできると言ってしまうと、後で後悔する。誰よりも早くから働き、誰よりも遅くまで働いた。」と語り、今年のコロナについて「ジェットコースターみたいだ。稼働率が100%に近い月、0%に近い月、自分も40年商売をやっているが初めて。逆に言うと悪いときは



露天風呂「海」景色は絶景である。

悪いなりに、良いときは良いなりにやることがあるとよくわかった。」と語った。「ニューとみよし」ではGOTO期間では好調で11月の一カ月の間キャンセルは1部屋だけで99%稼働していた、停止の影響で12月14日時点で28日以降の200件以上の予約キャンセルがあり、富岡さんはGOTO停止以降について「割引せず普通の料金でどれぐらい行くのか。逆に言えば宿の底力の見せ所だと思われ、楽しみにしている。」と経営者としての意気込みを語った。

今後について

「ニューとみよし」は来年から新館の建設を含む大きな増築工事が始まる。それに合わせて富岡さんは事業承継に取り組んでいる。富岡さんは事業承継について「次の立派な経営者を育てるのが一番の仕事だ。僕がもしちゃんと育成できればここをもっと立派な宿にしてくれるはず。人間何が大事かって次に自分の後をちゃんとバトンタッチをする人を育てるのが一番大事だと思う。」と語った。

編集後記

今回私たちは三島信用金庫さんの協力の下、「伊豆新聞本社」とホテル「ニューとみよし」の二社にインタビューを行いました。コロナ禍ということもあり、混乱した事もありましたが初めてこういった企業の取材に行った新入部員も多かったため、貴重な体験となりました。伊豆新聞本社の取材では新聞社としての垣根を超えた地元に対する強い愛を感じました。「ニューとみよし」の取材では、お客様へのサービスに対する情熱と従業員一人一人の事を重要視

(熱海高校報道部)

伊豆新聞本社 新聞を作る企業として



インタビューに答える佐藤裕一さん

伊豆地域を取材対象エリアとし、新聞を発行している伊豆新聞本社。今回我々はコロナが猛威を振るっているこの2020年に伊豆新聞がどのような取り組みをしているか知るために、本社に向き、記者の佐藤裕一さんと総務局次長の小原央多さんの話を伺ってきた。

記者として

取材担当の佐藤さんは新聞記者として新聞を書く上で心掛けていることは「自分の思いを相手に伝えるのではなく、相手の思いを多くの人に伝える。相手が言いたいことや必要なことを客観的に受け止め間違えないよう記事にする。」と語り「新聞を作るうえで正しいことを正確に分かちやく伝えるべきではない。だからちゃんと嘘じゃないのか確かめ、正しいことを伝えるべきではない。」

と話した。新聞社として新聞作成の基礎であり重要な部分を踏まえながら伊豆新聞本社では日々伊豆新聞が作成されている。また、誤報等のミスや失敗について「たまたま新聞に小さく訂正記事がついていると思うが、こちらが正しいと思いが、実際は違い、チェックをすり抜けてしまうという事がある。それらはあつてはいけないことであり、恥ずかしいけれど次の日の新聞で訂正し、正しい情報を載せるよう努めている。」と語った。また、取材や写真について「基本一人でやる。自分でカ

地域と共に

メラ係とメモ係を全部一人でやる。」と話し「新聞の写真を撮る際はニュースの内容が伝わるようなものを撮るよう心がけている。」と語った。佐藤さんは一人の記者として今中心に取り組んでいることについて「それぞれ持ち場があるが、自分は福祉や観光を中心に取り組んでいる。」と語り、小原さんは会社全体として取り組んでいることについて「コロナ禍で町の元気がなくなっているのを、町を盛り上げるように頑張っているお店を、軒一軒取り上げるなどして、元気のない街を新聞

で盛り上げるよう取り組んでいる。」と語った。伊豆新聞本社では新聞を書く上で必要なことを一つ一つ認識し日々新聞製作に取り組んでおり、コロナ禍で落ち込んだ伊豆地域を元気づける活動が進んでいる。



伊豆新聞本社の編集部の様子

佐藤さんは今後頑張りたいことについて「地元にある身近なお店を紹介するという読者から好評な企画があり、コロナ問題だけではなく切り口を変え、飲食店や地

